

せい た ふみ たけ
清 田 文 武

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文第72号
学位授与年月日 平成4年11月12日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 鷗外文芸の研究 青年期篇・中年期篇

論文審査委員 (主査)

教授 菊田 茂男 教授 鈴木 則郎
教授 佐々木 昭夫
助教授 仁平 道明

論文内容の要旨

1 研究の対象と方法

森鷗外(文久2<1862>-大正11<1922>)については、近代日本文芸史における存在とその多彩な作品とから、極めて多くの研究文献が出ている。それらを見ると、伝記的、思想史的、精神史的方面からのアプローチが主流をなしているといつてよい。鷗外文芸の解明に際しては、これらの研究成果に援助を得る必要があるけれども、文芸の自律性を重んじ、芸術としての作品を中心にし、て考えるかぎり、その文芸学的考察が要請されなければならない。

在来の文芸研究としての成果を観察しても、作品の成立事情とその背景・周辺等いわゆる形成論的方面の論考が目立ち、しかもそれらは、いまのところ美的形成にかかわる解釈学的方法と十分には連繫していない憾みがある。本研究は、そうした現状を踏まえ、鷗外の文芸活動・文芸作品の文芸学的解明に最終の目標を置いたものである。

鷗外の文芸活動は、伝記的区分をも参考にして、おおよそ

青年期(明治17—31)

中年期(明治32—45)

晩年期(大正元—11)

の三期に分けることができる。これは伝記的区分をそのまま適用したのではなく、文芸活動の形態、文芸様式の特徴に対応した把握である。ジャンルに視点を据えれば、それぞれ、評論の時代、現代小説の時代、歴史小説・史伝等歴史物の時代と概括できよう。

本研究では青年期と中年期とを直接の対象とし、中年期には一般にいわゆる壮年期をも含めている。

青年期は、作家としての基層を形成した時期であるが、特にドイツ留学の体験は、以後の諸活動にかかわり、文芸活動にも関係したので、これをも取り上げた。作家としての資性や環境等に関係する点では出自や故郷とのつながりも看過できない。中年期では、沈黙の小倉時代（明治32-35）にも照明を当てた。文芸観の再形成の消息、文壇再活躍開始時代の短編を研究の主たる対象に据えたが、これらの考察では、様式の問題等なお十分に論じていない点もあり、今後鷗外文芸全体の解明に俟たなければならないところもある。しかし、それへの基本的方向は、おおよそ示しえたのではないかと思う。

鷗外は一自作の楽屋裏を語って、「僕は天才ぢやない。僕は色々の材料を見つけて其れを組立てるだけだ。」という言葉を残している。他作家の作品を批評する際、よくその先蹤や典拠に言及した鷗外であっただけに、この言葉は自分の作家的資質や創作の機微を打ち明けたところがある。体験や実生活を、虚構を織り込んで作中に象嵌した場合も少なくなく、これらの事実は、鷗外文芸を考察する際、補助的な視点を提供するであろう。

芥川竜之介は、日本の近代文芸は古典の伝統と海外からの影響との交叉するところに成り立つという意味のことを述べた。東西の文芸に通じていた鷗外の場合もその例外ではない。内外の文芸は、鷗外作品の特質と精神との闡明に、比較・対比の視点によって、力を貸すことがあるはずである。内なる詩神、創作欲に負う文芸活動には、広く芸術・学問・思想あるいは時代の景況等も作用したが、それらとのかかわりを観察することが時に求められる。その点で、東京大学総合図書館の鷗外旧蔵書の調査も必要であろう。

しかし、外部からの刺激があっても、それらが鷗外にいかに関与されて独自のものを生み出すに至ったかという点に注意すべきことはいうまでもない。先蹤や典拠が見いだされたとしても、言語芸術としての当該作品は、一つの構造体としてその技術的性格がおさえられ、その世界、様式、文芸性・芸術性が解明されなければならない。それには、受容美学の視点も要請されよう。作品は、実人生を生きる作家の意図や方法をしばしば超えて、懐の深さを示すことがあるからである。

言語芸術として捉えられる文芸作品を形成する言語をめぐって、川端康成は、「単語の選択一つにも、その作家の生命はこもる。逆にいえば、その作家の個性は、単語一つからも究明できる。」と述べた。研究上作家の発言として示唆的であり、こういう考え方にも着意したい。しかし、語・言葉自体は、それがいかに重要であろうとも、必ずしも文芸を文芸たらしめる所以のものではない。それが作家の文芸的精神をもとに技術によって、作品の美的形成・文芸性にどう関係しているのかも観察しなければならないのである。

2 青年期篇

鷗外がドイツに留学して受けた最も大きな文化的衝撃・刺激は、西欧精神の特質と捉えた「自由と美との認識」にあった。鷗外旧蔵本に最も多く見られる書き入れが、この方面に関するものでも、それは明らかである。こうした点では、大学での生活、美術館・音楽会・劇場に出かけた美的体験が重要であり、またウィルヒョウ、ヘルムホルツら医学者やゲーテ、シラー、ハイネら作家・詩人の著作繙読のことがあずかっていた。しかも「自由」と「美」とは同じ文化的土壌に咲くものと鷗外は観じていたようである。

そうした鷗外も、帰国後の発言は、政治的自由、宗教的自由の問題にはあまり触れず、学問・芸術の自由をめぐるものが殆どであった。結局鷗外の西洋に対する姿勢は、「とつづくにの文の八千巻くりかへし大和心をよみひらかばや」（明治26）の詠にその基調が見られるとあってよい。しかし、それは東洋・日本の歴史や文化を否定したり、軽視したりする立場からのものではなかった。後年の言葉でいえば、洋の東西をしっかりと踏まえて立つ「二本足の学者」を庶幾するような心を抱いていたのであり、これが以後の諸活動を領導した。文芸もその伝統的精神をも重んじた点があったのであって、その例外ではなかった。

右のような鷗外の形成基盤には、祖父・母親譲りの覇気と西医であった父の諦念的精神とがあずかっていた。その中心は「目の人」としての資質にあったのではないか。外界に鋭敏・柔軟に反応する田舎人としての「椋鳥」性もこれに関係していたはずであり、その背後には津和野の人文的環境もあずかっていたと思われる。一代の啓蒙思想家で親戚でもあった郷里の先覚西周も、その学問観・文芸観をはじめ看過できない存在であった。

帰国後の鷗外は、医学・医事、文芸・芸術の分野で評論と翻訳とによって啓蒙活動を展開した。特に評論では、その覇気、自恃の念、新帰朝者意識もあずかってか、論争の形をとる場合が多く、唐木順三に「戦闘的啓蒙」といわせている。そうした鷗外は、18世紀ドイツ啓蒙思潮の一頂点をなしたレッシングに示唆される点もあったが、仔細に見ると島崎藤村のいわゆる「時代の調節者」という側面を示していた事実も見逃してはならない。文芸作品における文体の問題で示した態度もこれに関係していた。

啓蒙活動の具体的な面では、朝比奈知泉、ヘルムホルツの大学論とのかかわりで鷗外のそれが捉えられるが、この点は「舞姫」（明治23）の一背景ともなるものである。石橋忍月、坪内逍遙との筆戦、演劇改良論及び医学医事論争ではレッシングとのつながりをおさえるとき、啓蒙の姿勢が明らかになるとあってよい。文芸批評、「自由」の問題ではハイネ受容に負う発言があり、わが国におけるハイネ詩紹介の嚆矢となった翻訳も見逃せない。

これら鷗外の啓蒙活動の著しい特色は、真の学問の樹立、美・文芸の自律性の確立と芸術の振興の企図にあり、もって近代の文化国家建設に資することを願う点にあった。

広範な啓蒙活動・文芸活動の中、いわゆるドイツ三部作との関係では、その文芸理論・文芸観が、医学と対蹠的方向に支盤を求め、浪漫主義的な方向を示したことが注目される。新声社を主宰して

出した訳詩集『於母影』(明治22)も、形式・内容ともに同様の方向を呈示して、ドイツ三部作に通じるものが見いだせる。折からの文芸評論の立場を強化しようとする意識もいくらかはたらいて、「舞姫」以下の実作を世に問うたという点もあったのではないか。手沢本への書き込み等がこの間の事情・心理を示唆している。シラー作品の一訳者を批評した文章は、「駁而教之」という啓蒙精神を発揮したものであるが、「舞姫」執筆にかかわる鷗外の心事を推測させる二面性を窺わせる。すなわち主人公にも差し響くものがあると見られる、覇気と諦念との心である。文芸観、『於母影』、文芸評論及びシラー訳文の問題の検討は、ドイツ三部作成立に関係する文芸的支盤を明らかにする所以ともなるであろう。

近代日本文芸の始発となった作品に数えられるドイツ三部作は、右に取り上げた諸活動と直接間接につながっている。創作もそれに先立つ翻訳活動と関連する場合が少なくない。その点で、第1作の「舞姫」は、形式を主にトルストイの『ルツェルン』(1857、独訳の出版年不明)とその翻訳「瑞西館に歌を聞く」(明治22)とに示唆されるところがあったのではないか。従来唱えられていたツルゲーネフの『春の水』(1871)やハックレンデルの『欧州奴隷生活』(1854)は、この間の消息を十分には解き明かしてはくれないように思われる。それまで翻訳の小説・戯曲で口語文体を採っていた鷗外が、雅俗折衷の文語文体を採用して「舞姫」以下の小説を書いたことには、二葉亭四迷の『浮雲』(明治20-22)への意識も関係していたはずであるが、「瑞西館に歌を聞く」翻訳の体験で、ドイツ三部作の文体への手ごたえを感じた一事もあずかっていたであろう。特に「舞姫」の美的形成にかかわる感動詞「嗚呼」と対句的表現との多様は看過できない。表現上のこの特色は、作中人物の認識の問題とも連繫しており、作品の特質、様式に及ぶものでもあった。

「舞姫」の主人公太田豊太郎の人物造型の特色は、長男・田舎人のそれが大きくあずかり、そのつながりから「善人」という契機をおさえるならば、主題は、「自由の精神に触れる留学生活での一女性との邂逅により、官僚機構と自我と、愛と自己存立との対立し絡まり合う問題から、挫折的人生体験を経る中で自己と世の中とを知るに至った、新時代を生きる有為順良な一青年の、推移としての青春の一齣を語り明かす悲歎と痛恨との心」と捉えられる。主題の「愛」・「処世」・「自己存立」・「推移」及び「悲歎と痛恨との心」の契機から作品を照射するとき、その世界は構造・特質を開き示すのであり、特に「恨」の意味の重層性は看過できない。鷗外は、異文化体験・異国体験の様々な面を「舞姫」におのずと反映させ、日本近代文芸でも最も懐の深い作品の一つを書いたのであり、啓蒙活動の諸分野がそこに影を落としているのである。

第2作「うたかたの記」(明治23)は、南独の首府とその郊外の湖畔とを舞台に、ドイツ娘と日本人画家との愛と否運とを縦糸とし、二人の運命を決めた国王横死の悲劇を横糸とする小説である。こうした作品中のヒロインには、啓蒙活動を進める当時の鷗外孤立した心情のほか、ジャックギャラリーで見たシュタインレの絵『ローレイ』(1864)、ハイネの『帰郷』(1823-24)中の詩のいわゆる「ローレイ」といった、ドイツ浪漫主義の芸術・文芸があずかり、横糸としての国王とその死も、作品の浪漫性を方向づけた。しかし、「うたかたの記」には、『源氏物語』などの日本の古

典、あるいは民族的発想とのつながりもなければならず、この間の事情は、螢の形象を中心におさえるとき明らかになる。鷗外の自評にある「あはれ」の語は、これらの諸契機を総合することにより、それを現代化した美の徴標として浮かび上がってくるのである。

第3作「文づかひ」（明治24）は、鷗外のザクセンにおける体験を、小林士官なる人物の語りの形式で、帰国後の結婚や家の問題を秘かに織り込み、シェッフェルの『ゼッキンゲンのラッパ手』（1854）やユゴーの独訳『ノートル＝ダム・フォン・パリ』（原、1831）からの刺激をもとに書いた小説である。自我を貫いたドイツ乙女のヒロインを描いて、浪漫的な世界を展開するこの作品は古典主義的な出来をも示し、美的様式としては自評をも参考にして、王朝の物語における「面白し」の徴標で捉えられよう。三島由紀夫の鷗外文芸受容の相からすると、「雅」の美が作品世界の形成にあずかっているさまが、より明確になるのである。

こうしたドイツ三部作は、啓蒙活動の一環としては、『於母影』同様、一般の趣味性の開発・涵養を期し、文壇的には戯作的文芸からの脱皮への指針となるものであった。特に「舞姫」がモデルの存在を思わせることで人生の問題を深く感じさせて、新しい文芸となり得たのだと折口信夫は回想する。それは書くことによって心的危機を乗り切ろうとした作者を反映する作だったからにほかならない。

具体的な作品を取り上げての鷗外の文芸批評は、『めさまし草』に拠ってなされた。近世の評判記を受け継ぎ、クリスチャン・ニコライやレッシングの示唆もあった批評では、樋口一葉を高く評価した一事が注目される。この間の消息は「わかれ道」（明治29）、「たけくらべ」（明治28-29）に窺われる。幸田露伴のそれに比し、鷗外の批評は、文芸理論を素のままに出し、やや具体性を欠くきらいがあるが、美的契機を重んじる芸術派的な点を特色とする。文脈をたどり、人生派的批評を示す露伴や『青年文』に拠る田岡嶺雲とは異なるものであった。

その一葉からも刺激を受けたと見られる「そめちがへ」（明治30）は、洒落本に倣った小説であり、文芸の形式・様式に著しい関心を寄せていた鷗外を反映している。自国のことを書かないという批判への反応の一つでもあり、また斎藤緑雨ら「三人冗語」の合評仲間との交遊の副産物でもあった。

青年期の鷗外の小説はわずかに四編である。その世界はいずれも若い男女の愛とその行方とを浪漫的に描き、戯作に倣った「そめちがへ」の形式は別として、いかにも青年的様式の作品といえる。翻訳作品もこれと連動するところ少なくない。ともに、文壇に憧れる青年たちに、新たな領域の存することを指し示す作品となった。評論は、「戦闘的啓蒙」と呼ばれた一事にも窺われるとおり、激しい青年の士気を携えたものであった。

3 中年期篇

明治32年から35年まで、第12師団軍医部長として小倉勤務をした鷗外は、被左遷の意識を深くし、文芸活動もしなくなった。しかし、後への蓄積を行った重要な時期であったといわなければならない

い。師団の将校に講じたクラウゼヴィッツの『戦論』(1832-34)は、「純抗抵」の理念と「局面眼」の理論とにおいて、人生観と結びつくものとなった。これには、易学者根本通明からも学んだ『周易』の思想と契合点があり、「人主策」(明治34)として紹介したマキアヴェリの『君主論』とも、時間・運命の問題でつながりが認められる。一般の人に心理学を講じたことも看過できない。小倉での様々な勉強は、その人生体験とともに、その後の文芸の問題にも及ぶものとなったのである。

帰京後、ゲーテやハイネに刺激を受けて成った『玉篋両浦嶼』(明治35)は、小倉で接した陽明学も関係したと思われるが、主題は「事業」の人間の意義にあった。「沈黙時代」を経た心と折からの日露の緊張した国際関係とが生み出した韻文戯曲である。そのつながりでは、イプセンの『ブランド』(1866)を訳した「牧師」(明治36)と「日蓮聖人辻説法」(明治37)とが、「事業」や元寇のことを織り込んだ戯曲である点が注目され、外に向かったの鷗外の積極的精神を窺わせる。正岡子規との交際もあって与謝蕪村に親しんでいた鷗外は、日露戦争では、句作、詩作もして一卷の詩歌集『うた日記』(明治40)を残し、佐藤春夫・伊東静雄らに文芸的影響を与えたのであった。

ところで、青年期に文芸における美的契機を重んじていた鷗外は、小倉時代以後、その立場を否定したわけではなかったけれども、文芸観は変化を見せてその懐を深くする。西洋の芸術・文芸における形式の破壊と創造との実際から刺激を受けたことが、これに関係するところ大きかった。自らの資性もあったであろうが、こうした点が作品の多彩さと新しい形式との創始にかかわったはずである。学問上の刺激としては、哲学・倫理学・心理学が、芸術・文芸の動向と相俟って重要で、人間把握に新しい視点を提示したのであり、ショーペンハウアー、パウルゼン、リントナー、ヴェント及びハウプトマン、トルストイ、マーテルリンク、リルケらが関係した。「沈黙の塔」(明治43)がこのことをよく示している。

折からの日本の文壇における自然主義の隆盛に批判的立場をとったのは、その自己絶対化を図り、虚無・懐疑の目で人生・人間を見ることに終始する観があったからである。しかし鷗外は、自然主義自体については、初期のころとは違って、容認するところもあり対抗意識も手伝って様々な形で影響も受けたのであった。

右のごとき文芸観再形成の追尋に加えては、生来的資質の考察からも、鷗外文芸解明の視点は得られる。夏目漱石が音響に対し極めて鋭敏な反応を示した「耳の作家」とすれば、鷗外は極めて視力のある「目の作家」であった。鷗外は〈見える世界〉から〈見えない世界〉、〈事実の世界〉から〈意味の世界〉へという構造をとる作品を多く書いており、文芸作品一般がそうであるとしても、鷗外の場合その著しい観があるといっていよい。

以上の観点を視野に入れ、明治42年からの鷗外の文壇再活躍時代を、関心を抱いていた西欧の3人の作家・詩人とのかわりをおさえて考察すると以下のとおりである。

マーテルリンク(1862-1945)は、新浪漫主義の驍将として、当時大いに迎えられたが、鷗外はその初期の厭世主義的作風を見逃さなかったものの、象徴主義的、理想主義的文芸として受容した。文壇復帰の第1作で、題材をラッセンの『古代インド誌』(1858-74)に得た戯曲「プルムウラ」

(明治42)は、ヘッベル、ワイルドらの戯曲がその形成にあずかり、世紀末芸術の挿絵画家マルクス・ベーマーも刺激を与え、マーテルリンクもいくらか女主人公を通してかかわった。この作は、簡素・古樸な中にも新浪漫主義風の様式を呈示し、後の戯曲への先蹤となった点がある。

次の戯曲「静」(明治42)は、劇的葛藤の只中にある人物よりも、人生の嵐の去った日常における人物に照明を当て、人間・運命・世界の真実を写そうとするマーテルリンクの静劇(象徴劇)の理論がはたらいたものである。しかし、能の様式の影響するところもあり、この間に暗示的象徴によって美を表すという鷗外戯曲の様式をよく具えた作品となっている。史劇に現代語を用いた画期的な試みの戯曲であり、これは「生田川」(明治43)にも踏襲されて反響を呼んだ。芥川龍之介が、日本における新浪漫主義の最も完成した作と評した「生田川」も、技法的には同じくマーテルリンクの静劇と能との交叉するところに成立した作で、「静」とともにめでたい戯曲となったのである。

前掲「ブルムウラ」の次に発表され、鷗外最初の口語体小説となった「半日」(明治42)は、その構成・方法等極めて技巧的で、自然主義を奉じる作家・評論家の理論とは方向を異にする。題材には「家」の亀裂の問題を扱って、自然主義作家と類似する点が認められるけれども、「孝」の問題にも照明を当て、リルケ(1875-1926)のいわゆる「因襲の外の関係」に関心を表すきっかけを作った小説となった観がある。かねて自利と利他との行為・行動の問題に注目し、新時代での人間関係のあり方に考えをめぐらせていた鷗外は、リルケからの刺激で「電車の窓」(明治43)、「百物語」(明治44)及び後の歴史物の「相原品」(大正5)のヒロインを造型する点があったのである。隠蔽していたものを暴くという方向に趨った当時の自然主義とは対照的にその人物を描き、現代思想に一指針を示した作品であった。

鷗外の「棧橋」(明治43)、「普請中」(明治43)は、リルケとは直接のつながりがないにせよ、詩人の『人生に沿って』(1898)所収の小説と対比するとき、〈笑いと涙とのはざま〉を描いて特色を開き示すところがある。それは日常の傍らからふと題材を得た観のある作品であり、「電車の窓」・「百物語」も同様である。「棧橋」はまた絵画性の際立った小品で注目されよう。造形芸術の趣味を文芸に応用する人物とリルケを解した鷗外の「花子」(明治43)は、リルケやボードレール、ロダンに題材と示唆とを得て書いたもので、自らの文体の特質と相俟ち、ロダンに映った一日本女性の身体的、精神的美を、造型性を感じさせる、アポロンの世界と構造との中に描いた作品である。

「半日」の翌月公にした「仮面」(明治42)は、肺結核をめぐる自分の体験にニーチェ及びシュニッツラー(1862-1931)を下敷にして書いた観のある戯曲である。しかし、シュニッツラーとは異なり、倦んだ世界諦念やペシミズムは感受できず、ニーチェの実存的問題意識も希薄であるものの、病を克服して生きようとする人物を内光的に捉え、鷗外的な世界を提出している。シュニッツラーがよく取り上げた催眠術も、身近な事件を織り込み、「魔睡」(明治42)で描いた。三島由紀夫が「ドイツ世紀末文学の淡白な日本化」と評したもので、真実と虚偽との間にゆれて懊悩する主人公は、家庭的な問題を扱った点で「半日」と契合性がある。当代の大学生と女学生との交際の問題を対話風にした「団子坂」(明治42)は、夏目漱石の「三四郎」(明治41)に触発された点があり、

鷗外には「青年」(明治43-44)に先立った漱石への文芸的反応となった。これにはまたシュニッツラーの「短剣を持ちたる女」(1902)からの示唆もあったが、「三四郎」とは異なり、性愛の問題を絡ませている。以上3作は、医師としての鷗外の視線がはたらいっているところに特色を見せ、同じく医師であったシュニッツラーに触発されたであろう。

中年期の鷗外で、マーテルリンク、リルケ及びシュニッツラーは、創作への種々の刺激を与えたが、その様々な個性はどのような関連の下に受容されたのであろうか。

第1は、反自然主義・非自然主義の詩人・作家として、新浪漫主義的な観点から読まれたことである。特にマーテルリンクは、初期のリルケに影響を与え、シュニッツラーもこの2人には関心を抱いていたので通底する点があると感じられたはずである。作品の数だけでいえば、鷗外が最も多く訳したのはシュニッツラーの7篇、リルケの6篇であった。

第2は、既存の文芸の形式を破壊し、新たな形式の創始を行い、活発な文芸活動を展開したことであった。

第3は、近代の倫理・道徳における献身的、犠牲的精神の問題で、自利・利他の問題にかねて関心を抱いていた鷗外に、マーテルリンク、リルケは注目される存在となった。

第4は、危険思想の問題であり、第3ともかかわりがあるが、特にリルケでは、「因襲の外の関係」の理念が重要である。新しい思想は既存のそれを破壊する形になるため、危険なものを蔵していることになるからである。

第5は、「見切り」の精神である。第1・第2が文芸の形式的面に関係しているとすれば、第3・第4は内容・思想的方面に関係していると捉えられ、「見切り」の精神は後者と結びつく。鷗外では、これはいわゆる「諦念」の問題とも絡まり合って、その文芸を導く場合が少なくなく、そこに独自の世界が形成される。「見切り」が退嬰的、否定的にはたらくのではなく、理想主義的な方向で作動するのである。

以上本研究では、多くの作家・思想家とのつながりに照明を当てたが、そのことは鷗外文芸の精神の多面性、懐の深さをおのずと示していることになるであろう。

参考 次に研究の概要を目次で示す。

青年期篇

序説 研究の対象と方法

第1章 鷗外のドイツ留学

第1節 「学問の自由」の認識の体験

第2節 「自由と美」の認識の体験

第3節 鷗外の西洋意識

第2章 鷗外の形成的基盤

第1節 鷗外の家系意識

第2節 鷗外の故郷意識

第3節 鷗外における西周

第3章 鷗外の啓蒙活動

第1節 鷗外の啓蒙活動

第2節 鷗外の大学論とその背景

第3節 鷗外におけるレッシング

第4節 鷗外におけるハイネ

第4章 ドイツ三部作成立の文芸的支盤とその背景

第1節 鷗外の文芸理論・文芸観

第2節 『於母影』とドイツ三部作

第3節 鷗外の文芸評論とドイツ三部作

第4節 「菩提樹畔の逍遙」細評」とその周辺

第5章 ドイツ三部作の世界

第1節 「舞姫」の世界

第2節 「うたかたの記」の世界

第3節 「文づかひ」の世界

第4節 鷗外におけるドイツ三部作

第6章 鷗外と樋口一葉

第1節 鷗外の一葉評

第2節 「そめちがへ」の世界

中年期篇

第1章 小倉時代の鷗外

第1節 鷗外における小倉時代

第2節 鷗外における『周易』

第3節 鷗外におけるクラウゼヴィッツ『戦論』

第4節 鷗外におけるマキアヴェリ『君主論』

第5節 鷗外の心理学講義

第2章 鷗外の文芸と大国の「圧」

第1節 『玉篋両浦嶼』の世界とその位相

第2節 イブセン『プラント』の翻訳とその周辺

第3節 鷗外の俳句

第4節 『うた日記』と伊東静雄

第3章 鷗外における文芸観の再形成

第1節 鷗外と芸術の形式

第2節 鷗外と自然主義

第3節 鷗外の文芸観と心理学

付 鷗外用語「写象」

第4節 鷗外の文芸観と「霊」Seele への関心

第5節 鷗外の感官とその文芸

——漱石との対比を中心に——

第4章 鷗外におけるマーテルリンク

第1節 活躍準備時代と短編

第2節 鷗外とマーテルリンク

第3節 「ブルムウラ」の世界

第4節 「静」の世界

第5節 「生田川」の世界

第5章 鷗外におけるリルケ

第1節 「半日」の世界からリルケへ

第2節 鷗外の短編とリルケの「因襲の外の関係」

第3節 『三田文学』掲載の3作

第6章 鷗外におけるシュニッツラー

第1節 鷗外とシュニッツラー

第2節 「仮面」の世界

第3節 「魔睡」の世界

第4節 「団子坂」の世界

第7章 鷗外におけるマーテルリンク、リルケ、シュニッツラー

付記 本レジュメでは、青年期篇・中年期篇を通ず形で、研究の対象と方法についての要約を最初に掲げた。

論文審査結果の要旨

本論文は、森鷗外の文芸活動のうち、主として青年期及び壮年期をも含む中年期を対象として比較文学的考察を行ったものである。晩年期の文芸的世界の特質を、中年期的様式の深化とみる論者の見解が前提となっている立論であることは言うまでもない。論者が、「中年期篇」において、小

倉時代以後の鷗外の文芸観の再形成に言及し、新たな文芸活動への意欲について詳述しているのはそのためである。しかしながら鷗外の場合は、その文芸的出発に際して、家系意識や故郷意識、西周との出会い、ドイツ留学による西洋体験などの精神的原風景の介在する事実を無視するわけにはいかない。いずれも文芸的営為との間に、深長な脈絡を有するからである。「青年期篇」において、そうした側面についての基礎的作業が慎重に進められているのも故なしとしない。

「序説 研究の対象と方法」において、まず、上のように問題点を整理した論者は、新たな視点による比較文学的考察の必要性を強調する。

続く「青年期篇」は、全6章20節から成り、主として鷗外の文芸的出発の前後を、比較文学的視座から明らかにする。

「第1章 鷗外のドイツ留学」では、大学生活や芸術的環境からの衝撃の実態を明らかにしたうえで、ホフマン、フォイト、コッホ、ペッテンコーフェル、ウィルヒョウ、デュ・ボア・レーモン、ヘッケル、シュヴェーグラーらの医学者・自然科学者・哲学者の著述に啓発されて西欧的「学問の自由」への認識に目覚め、更にゲーテ、シラー、ハイネ、レッシングらの文芸家の著作に刺激されて人生や芸術の「自由と美」の精神に開眼していく過程を丹念に辿る。帰朝後の医学・医事、文芸・芸術の分野での評論と翻訳の精力的な活躍について詳述する「第3章 鷗外の啓蒙活動」の論旨を誘発し、補完する部分でもある。鷗外の啓蒙活動の特色を、真の自由な学問の樹立、美や文芸の自立性の確立と芸術の振興による近代的文化国家の建設を希求するものであった、とする論述は、きわめて説得的であると言えるだろう。「第2章 鷗外の形成的基盤」は、そうした西洋的近代意識の源流を、故郷石見の精神的・学問的風土に探り当てたものとして注目される。

「第4章 ドイツ三部作成立の文芸的支盤とその周辺」及び「第5章 ドイツ三部作の世界」においては、『舞姫』・『うたかたの記』・『文づかひ』の三部作が、それぞれトルストイの『ルツェルン』、シュタインレの絵画とハイネの詩、及びシェップフェルの詩やユゴーの小説などを踏まえて成立したものであることを比較文学的に究明し、精密な作品論を展開しつつ幾多の新見を提示している。また、これらの三部作に、鷗外独自の浪漫主義的作風への志向を指摘している点も見落としがたい。「第6章 鷗外と樋口一葉」では、そうした浪漫主義的傾向が一葉からの啓示によって更に助長され、やがて『そめちがへ』へと定着していく様相を浮き彫りにして創見を示す。

全7章26節から成る「中年期篇」は、小倉左遷時代から晩年期の歴史小説・史伝ものの世界に至る、いわゆる壮年期をも含む旺盛な文芸活動の期間を対象とする。文芸的蓄積と文壇の再生の時期に当たり、鷗外文芸の精神的基盤が据えられた、と述べて、論者はその意義を特に重視する。

「第1章 小倉時代の鷗外」においては、『周易』に「時中」の精神を学び、クラウゼヴィッツの『戦論』から「純抗抵」と「局面眼」の人生態度を習得し、マキアヴェリの『君主論』に「運命」観を啓発された、と説いて、「待つ」・「耐える」・「明視する」・「見切る」・「断行する」という「消極」と「積極」の織り成す鷗外文芸の重要なモチーフの形成を指摘する。きわめて注目すべき提言である。

「第2章 鷗外の文芸と大国の『庄』」で、ゲーテやイプセンからの影響を具体的に検証した論者は、「鷗外の俳句」についても新たな視角を提供し、続く「第3章 鷗外における文芸観の再形成」において、マーテルリンクやリルケ、シュニッツラーからの示唆の下に人生観照の転換を図り、「見える世界」から「見えない世界」へ、「事実の世界」から「意味の世界」へと文芸観に変貌をもたらした、と述べる。すべて小倉時代の人生策の展開と深化の様相として捉える点に、新見が認められる。「運命論」の装置を導入して作品解釈を試みる「第4章 鷗外におけるマーテルリンク」、「因襲の外の関係」から献身的・犠牲的精神や利他的個人主義の「現代思想」性を認知する「第5章 鷗外におけるリルケ」、「仮面」の哲学を援用して作品構造の本質に迫る「第6章 鷗外におけるシュニッツラー」は、いずれも先行3章の論旨を受け、「第7章 鷗外におけるマーテルリンク、リルケ、シュニッツラー」へと収斂する。反自然主義・非自然主義の立場に拠り、既成の文芸形式にとらわれず、近代の倫理・道徳における献身的・犠牲的精神や利他的個人主義の見直しによる新たな市民権を要請し、「因襲の外の関係」と「見切り」(Entsagung)の精神の高揚を呼び戻すところに中年期鷗外文芸の磁場を設定し、更にそこに晩年期の理想主義的「諦念」の精神への回路を読み解く論者の着眼は、多くの新見を含み、論述はきわめて説得力に富む。

以上のように、本論文は、青年期及び中年期の森鷗外の文芸的世界の全体像を、比較文学的観点から照射しようとするものである。広く従来の研究史を踏まえ、通行の諸説に疑義を呈しつつ、新たな資料によって自説を補強し、文芸的構造の分析と作品の解釈に自らの創見を慎重に導入して、日本的伝統を西洋的近代精神によって捉え直し、その再生化を試みる鷗外の精神運動の振幅の体系化を企図した精到な論述であることは言うまでもない。特に、東京大学総合図書館所蔵鷗外文庫の手沢本書き込みに対する精緻な調査によって、鷗外研究に数多くの新資料を提供した功績は高く評価されるべきであろう。

本論文においては、作品論の構築に当たって、部分と全体との関連に有機的脈絡を欠く事例も少しく見受けられ、また、鷗外における事実(真)としての医学と理想(美)としての文芸との相関性の問題も今後に残されてはいるものの、いずれも論述内容の評価にかかわるほどのものではない。

総じて、本論文は、森鷗外の比較文学的研究に未踏の分野を切り開き、斯学の水準を著しく高めたものであることは、疑いを入れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。